

Willingness to Communicate (WTC)から見る 学習者心理



Tomoko Yashima, Ph.D.

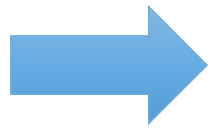
LET関西秋季大会

October 8, 2016

Willingness to Communicate (WTC)

米国のコミュニケーションの分野で生まれた概念

コミュニケーションをするかどうか、選択の余地がある場合に
コミュニケーションをする傾向 (McCroskey & Richmond, 1991)



第二言語分野に導入 (MacIntyre et al., 1998)

*readiness to enter into discourse at a particular time and
with a specific person or persons, using an L2*

WTCを生み出すことも、言語教育の目的であってもよいのでは？

なぜ日本の英語教育にWTCが必要？

アメリカに滞在する高校生の調査より

八島(2004)

When I talk, they are friendly, but when I am quiet, I am the air.

...私といてもおもしろくないだろうなとかかって自分の殻に入ってしまう

日本だったら私が黙ってたら、友達がどうしたのって声かけてくれるけど、アメリカでは、*'She is quiet; she doesn't want to speak to us.'* 彼らはそう思う。だから私からはなしかけないといけない

I stopped taking lunch and instead went to cafeteria and said 'Can I sit here?'

待っていても話かけてもらうことが期待出来ない状況で、英語で自らコミュニケーションを開始する積極性をもつことが、ホストとの対人関係のきっかけを作る上で重要であった。

Low WTC/ Silence



*Non-participation
Voicelessness*



このコミュニティでの日本人の位置取りは?

(Yashima, 2010)

日本人は聞き分けの良い子っていう感じですね

ひたすら
協調

議論となると蚊帳の外ですね。

ヨーロッパの人は同じ年と思えないほどしっかりしている。
日本人は自分の意見を
もっていないと思いました

なぜ日本の英語教育にWTCが必要？

■SLA の観点から

L2 を発達させるには、output として使う必要がある(Izumi, 2003; Swain, 2005)。ことばはコミュニケーションを通して習得される (Ellis & Larsen-Freeman, 2009; Tomasello, 2003)。

教室を出ると、L2 を使う機会は自動的には生じない。(e.g., Norton, 2000; Yashima et al. 2004)

■国際コミュニケーションの観点から

世界に届く声を創るために、英語のWTCが必要

世界に届く声を創るために

- 日本には対話がない (e.g., 北川・平田, 2008)
- 意見が違って当たり前という前提から出発し、(特に人間関係への配慮や力差がある状況で)話し合いを通して違いをすり合わせたり、埋めていこうという強い伝統はない。

しかし。。。

- The **L2** may create **a dialogic space** that is different from the L1 space.

だからこそ **L2 WTC**。。。

- Creating voices that reach the world (Yashima, 2015).

学習者を理解するために

教室におけるL2WTC関連要因

社会的要因

クラスの雰囲気

クラスメート・先生との関係性

性格

外向性・内向性

不安

これまでの学習経験

学習動機

個人要因

英語でコミュニケーション
をする

Willingness to Communicate
In English

英語を使えるという自信
できる感

学習行動

スキルの習熟

外の世界とつなぐ要因

言語文化への興味

国際的志向性

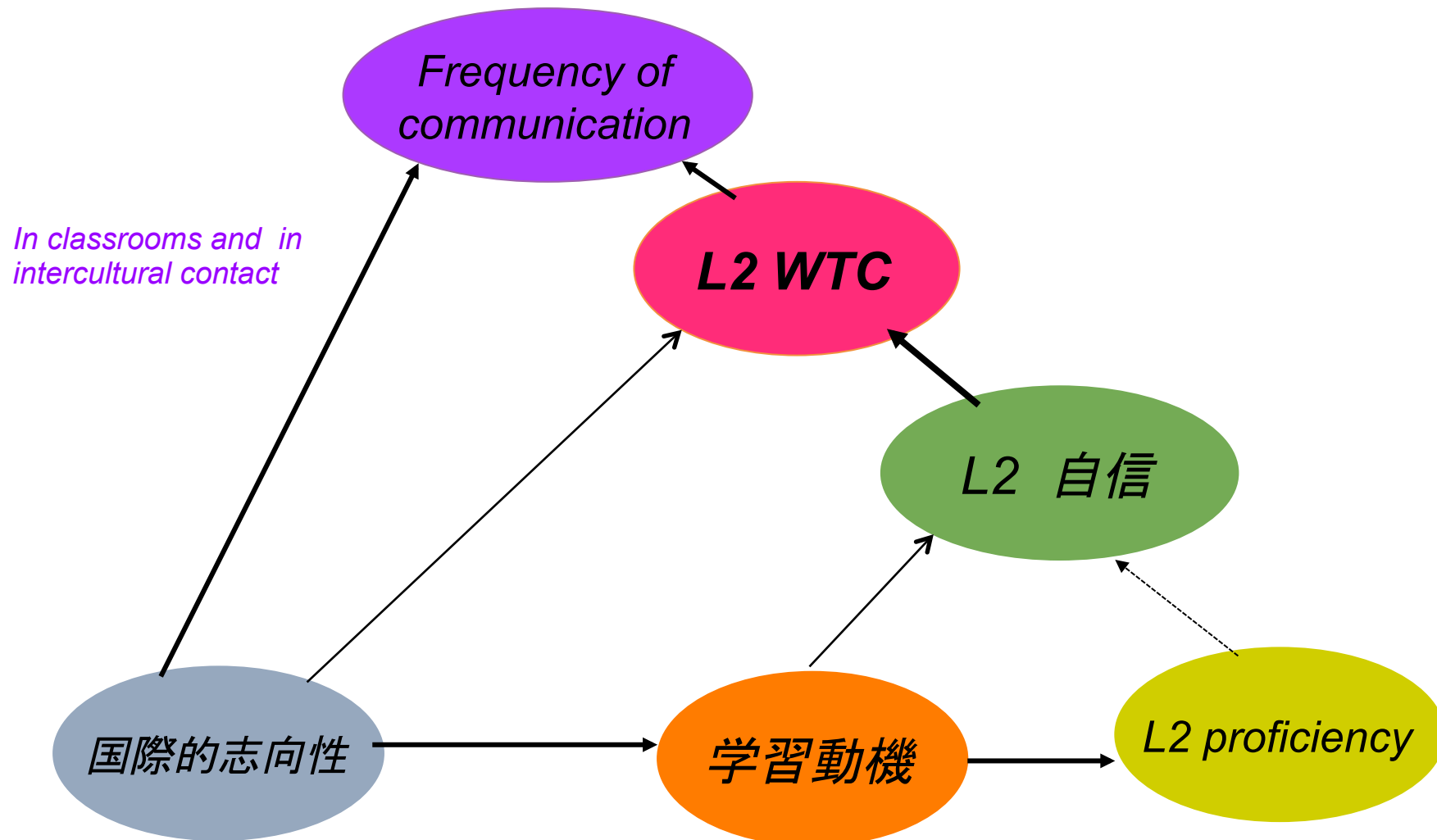
異文化への接近傾向

国際的職業・活動への興味

国際問題への関心

L2 WTC 関連要因

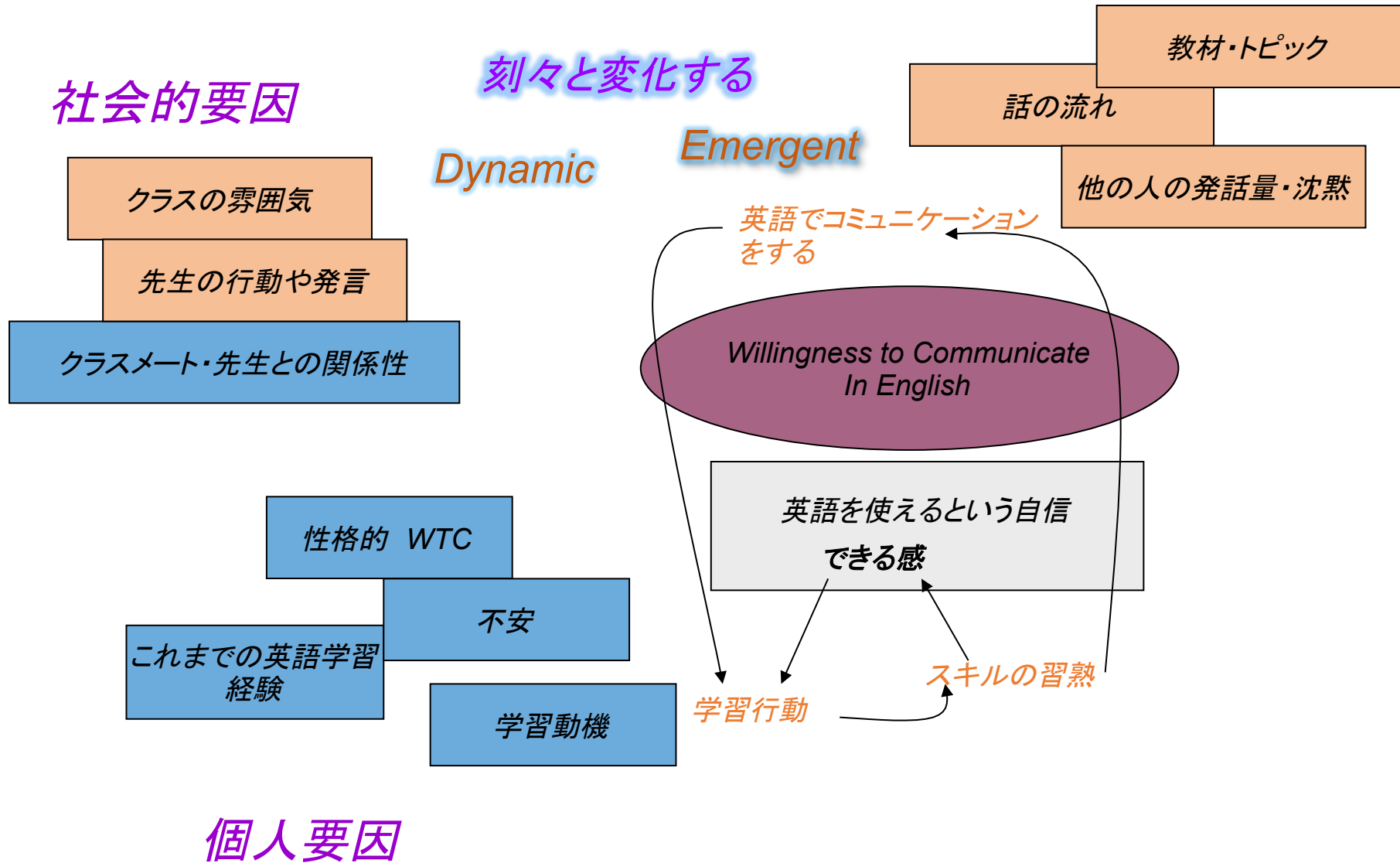
共分散構造分析による結果のまとめ



(Yashima, 2002; Yashima et al. 2004)

Social Turn

教室におけるL2WTC関連要因



教室内のWTCを理解するために

- 教室のなかで刻々と変わるWTCをどう捉えるか？
- グループ全体としてのWTC(発話量・沈黙量)とそのなかでおこるグループ構成員個人のWTCをどう捉えるか？
- 持続的な性格傾向としての *trait WTC* と教室のなかで上下する *state WTC* をどう捉えるか？



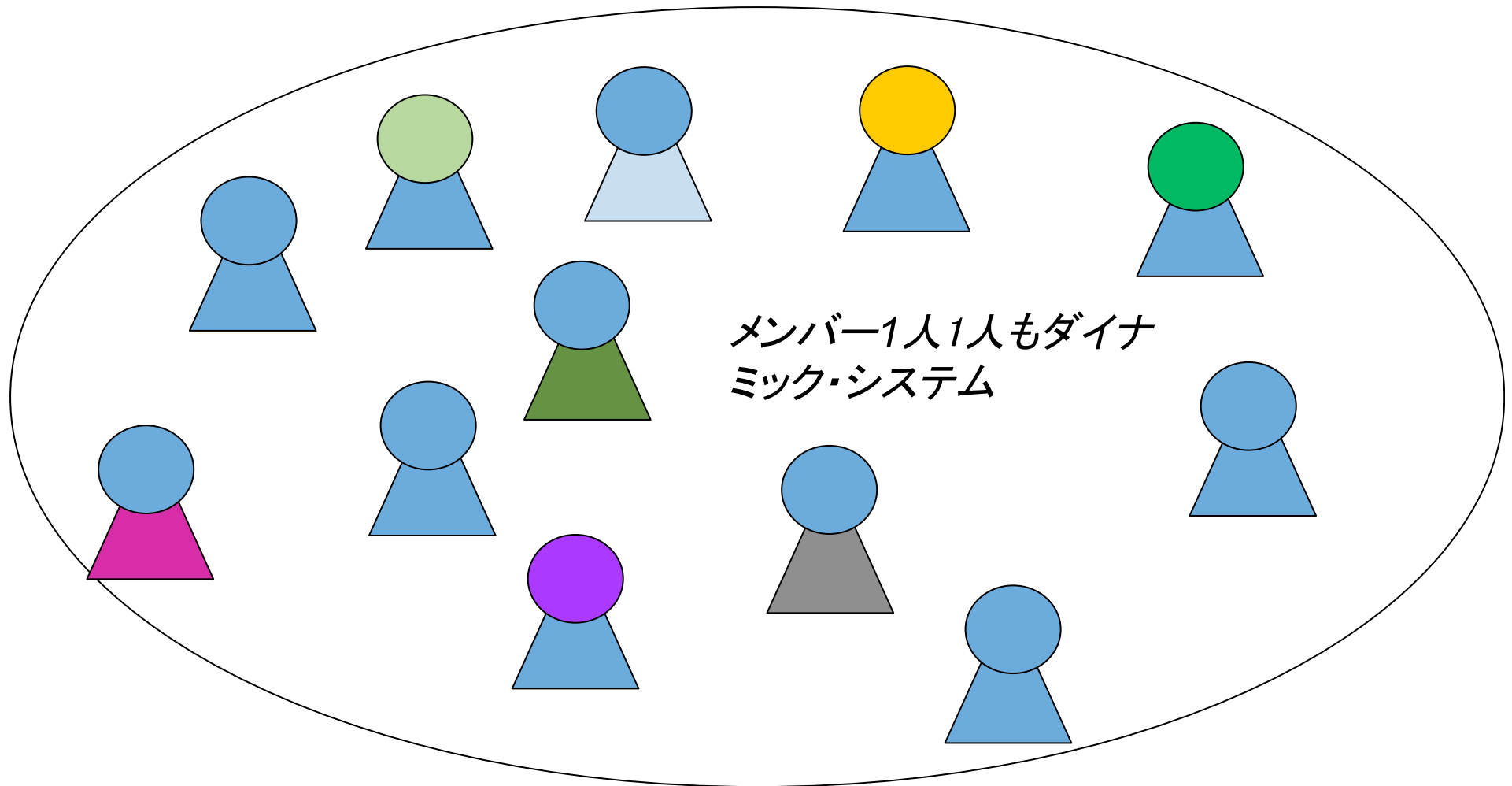
We face methodological challenges.

Study

Yashima, MacIntyre, & Ikeda (2016)

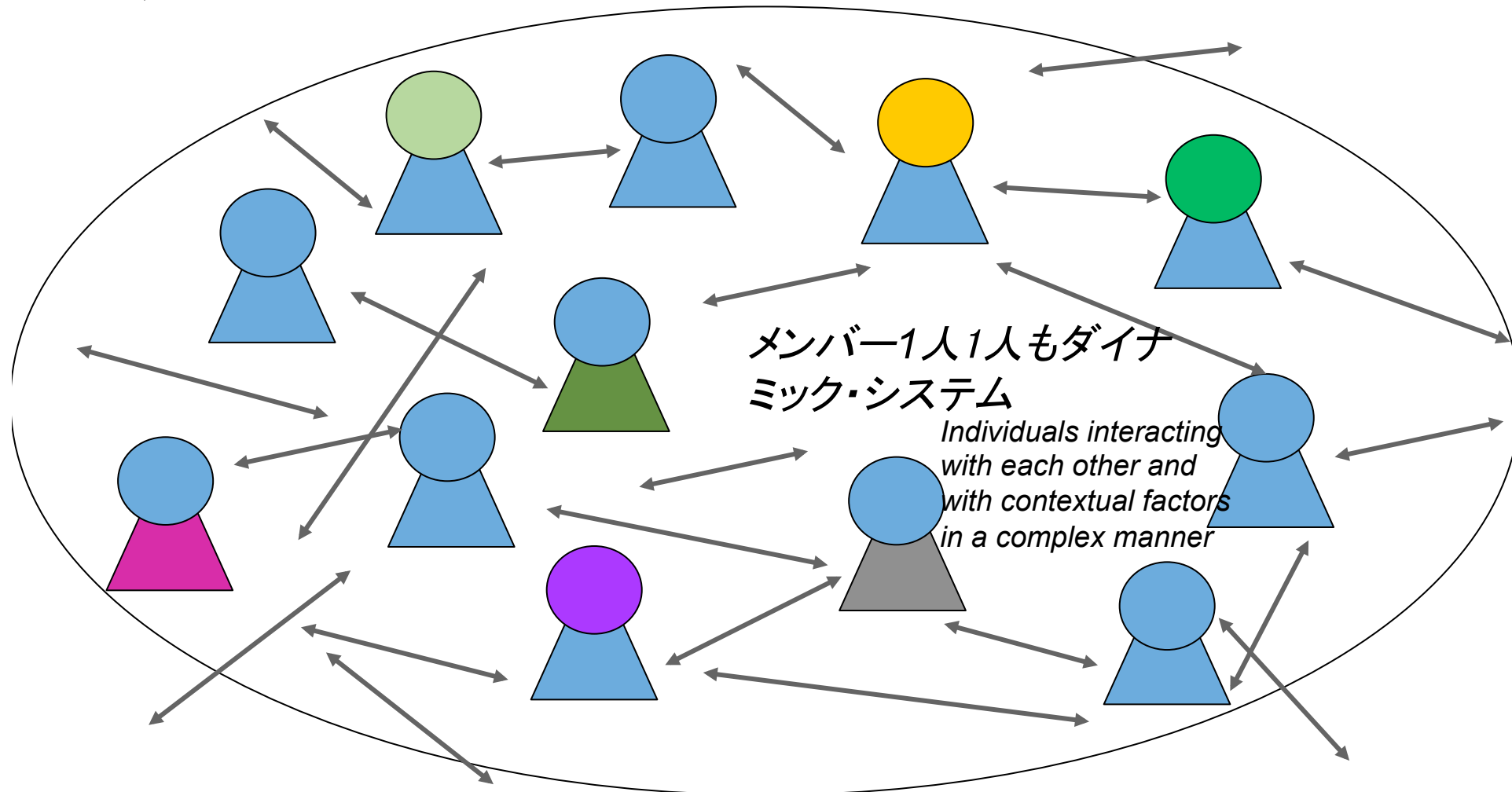
Yashima, Ikeda, & Nakahira (2016)

教室のコミュニティはダイナミック・システム



コンテキスト: 先生の行動や発言, クラスサイズ, 教材, 会話・議論のトピック, 座席配置や部屋の大きさ, 発言権をめぐる力差, 学校文化、規範

教室のコミュニティはダイナミック・システム



コンテキスト: 先生の行動や発言, クラスサイズ, 教材, 会話・議論のトピック, 座席配置や部屋の大きさ, 発言権をめぐる力差, 学校文化, 規範

日本の EFL で、沈黙は 常態 (King 2013) *attractor state*

■ King (2013): 48 時間の授業観察

学習者が自ら開始したコミュニケーションの時間は？

→ 7 分, or 0.24% (質問の答えとしての発話: 150分
5.21%)

Silence as “a robust trend, with minimal variation, toward silence” or “a semi-permanent and relatively predictable attractor state” in Japanese EFL classrooms (King, 2013, p. 12-13)

→ I-R-F パターンを
する時間を設けてみたら？

Initiation-Response-Feedback
T: What is the capital of Japan?
S: Tokyo.
T.: Good!

Objectives of the study

教室コミュニティとその成員であるそれぞれの学習者は、この課題においてどのようなコミュニケーションを行うだろうか。

- コミュニティ全体としてのコミュニケーション行動 (*talk silence pattern*) に注目する → **RQ 1**
- このコンテキストのなかでおこる個人個人のコミュニケーションに注目する → **RQ 2**

参加者

- 外国語を専攻する21 人の日本人学生(1年生)
- 翌年カリキュラムの一環として一年間英語圏の大学に留学する予定
- 16人は2週間以上、5人は5ヶ月以上の海外経験あり

Teaching intervention

90分のlistening and speakingの授業1セメスタ(全15回)のうち12回において、20分間のディスカッションを実施

The flow of the class

Duration	Activity
15 min.	Quiz (vocabulary, review of the previous class)
35 min.	Activities using the textbook (warm-up information exchange, comprehension check)
10 min.	Small-group discussion
20 min.	Whole-group discussion
10 min.	Reflection

Data collection

ディスカッション・セッションの実施前

(a) 質問紙調査 (性格不安、L1WTC、L2WTC)

ディスカッション・セッションの実施中

(b) 各セッションの録音

(c) TAによる観察ノート

(d) リフレクションシート

(状態不安スケール)

+ (参加できた・できなかった理由について分析)

Data collection

ディスカッション・セッションの実施後

(e) セッションを振り返っての記述

(議論の間何を考えていたか)

どの程度議論の準備をしたか—12項目

(f) 発話回数の違う3人の学生とインタビュー

(半構造化面接)

Data analysis

ディスカッションセッション

- 書き起こし
- 集計
 - 学生、教師の発話量(時間)
 - ターン間の沈黙時間
 - 学生の発話回数

インタビュー

- オープン・コーディング
- 析出されたテーマについて3人の比較

Results

コミュニティ全体としての
コミュニケーション行動
(*talk-silence pattern*)

Proportion of student talk, teacher talk, and silence during 12 discussion sessions

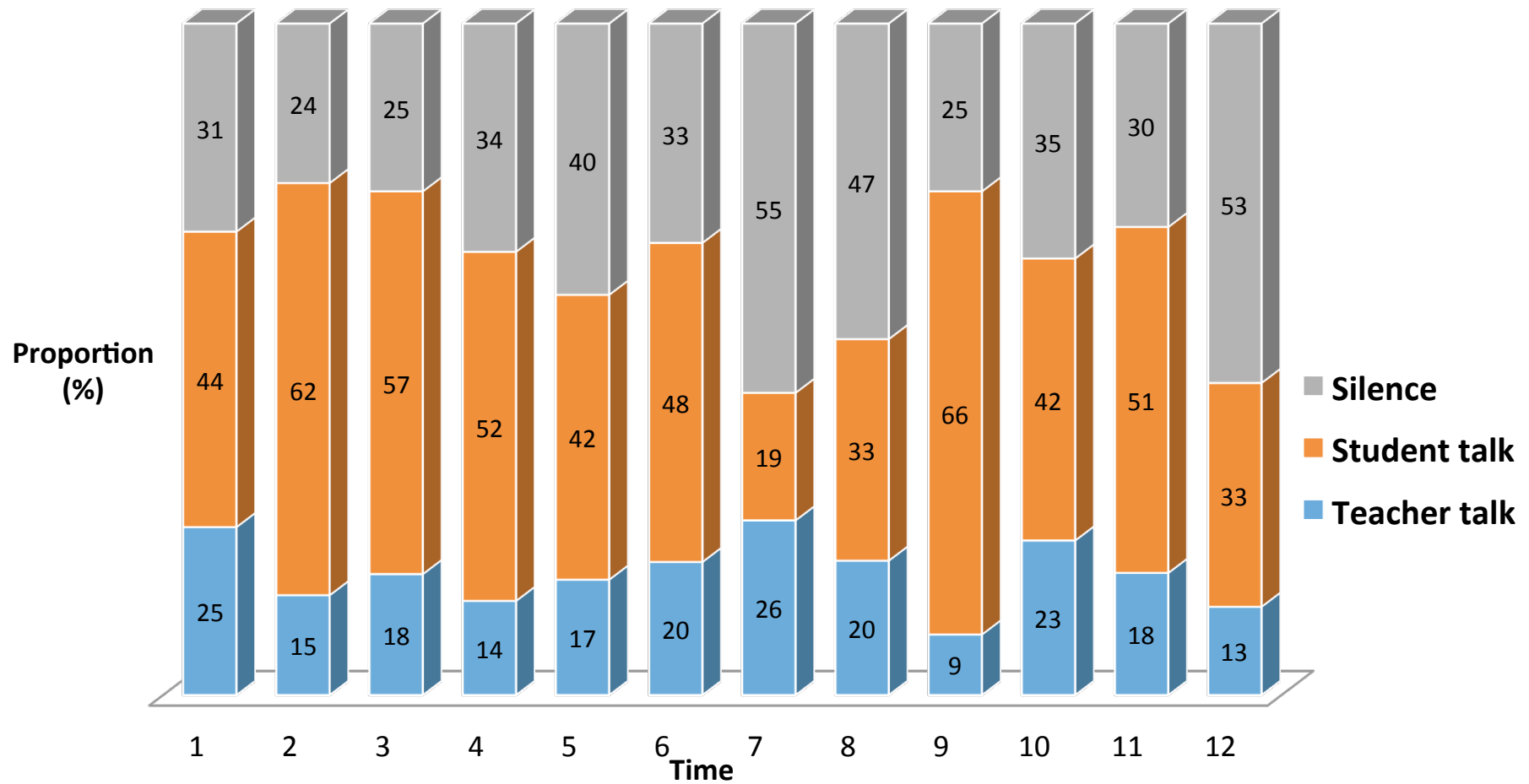


Figure 1. Proportion of student talk, teacher talk, and silence

Proportion of student talk, teacher talk, and silence during 12 discussion sessions

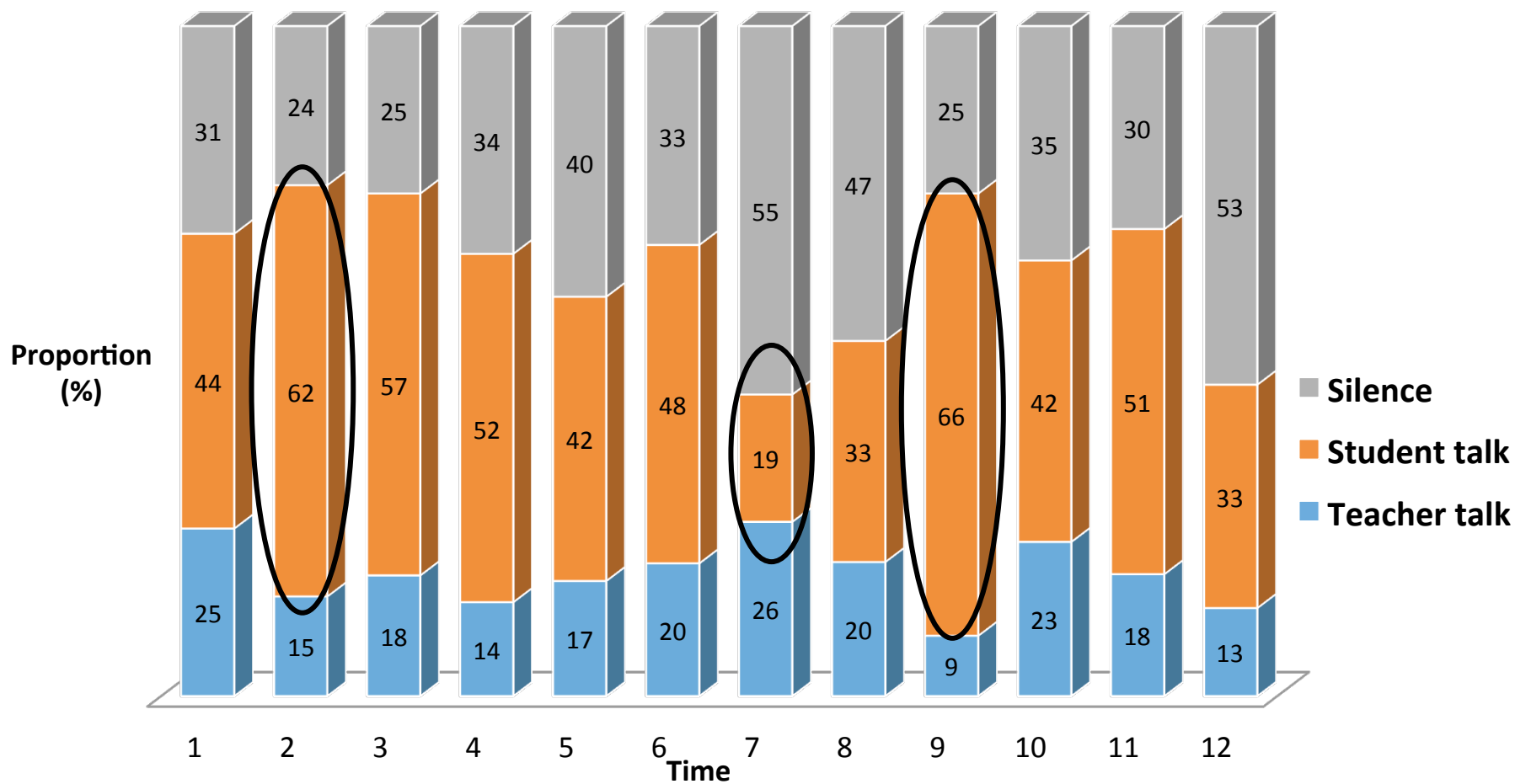


Figure 1. Proportion of student talk, teacher talk, and silence

何がコミュニティ全体のtalk-silence patterns を生み出したのか？ ディスコース分析

Time 2 学生の発話割合: 62% 1ターンの平均語数: 20.21

Topic: *How was your first name chosen?*

トピック、リーダーシップ、新しいことを始める新鮮さ

Time 7 学生の発話割合: 19% 平均語数: 6.24

Topic: *What are the factors in owning a successful restaurant?*

トピック、リーダーの不調、中だるみの時期・季節

Time 9 学生の発話割合: 66% 平均語数: 17.09

Topic: *What is your type of Multiple Intelligence?*

トピック、リーダーの不在にグループが適応

個人のコミュニケーション行動 と心理

何が学習者の発話回数 of 個人差を生み出すのか？

Taki

Nachi

Oto

Student	TOEFL ITP	Total N of utterances (self-selected)	Trait L2 anxiety	Trait WTC (L1)	Trait WTC (L2)
Taki	487	40(33)	2.33	4.75	4.75
Nachi	487	12(9)	4.67	5.75	2.75
Oto	490	1(0)	5.67	3.50	3.50

Student	TOEFL ITP	Total N of utterances (self-selected)	Trait anxiety	WTC (L1)	WTC (L2)
Taki	487	40(33)	2.33	4.75	4.75
Nachi	487	12(9)	4.67	5.75	2.75
Oto	490	1(0)	5.67	3.50	3.50
Class Mean	469.06	21.9	4.23	4.24	3.72
Norm (N=265)			4.35	4.41	2.95
Ryan (2008) (N=1896)			4.09	4.04	1.89

Taki

- 性格不安（低い）
- L1WTC L2WTC（高い）
- 英語使用経験が豊富（高校で、英語で議論をする経験あり）
高校で1年間の留学経験



クラス全体が沈黙になるのを嫌う、議論を進める責任
自分が議論を独占することを嫌う



- 発言回数多い
- 他者を巻き込もうとする、他者の発言につなぐ談話的特徴
- Time 9では、質問・回答サイクルを始める（結果として最も学習者の発話量の多い回となる）

*But I agree with Yaya and Masa's opinion....
As Shiki said, I think.....*

Taki

私は、最初は、何か、ディスカッション始めるときも、まあ、誰かが言ってくれるし。まあ、5人ぐらい言ったら言おうかなーって考えてたのが。なんか、だんだんタイミングがつかめるようになってきて。で、この人の意見分かるなーって思ったあとに、それにプラス α で自分の意見をいったりするように変わっていったと思います。

フロアを独占することについて

それは自分自身、んー、他人にも考えて欲しいから。自分ばかりしゃべってる自分自身が嫌だから。

授業って個人と教師で行われるものじゃなくて、集団で行われるものなんで。一人だけがいつもしゃべってる状況って、私にはちょっと、おかしいなって思うものがある。同じ環境におるということは、他の人にも発言するチャンスがあるわけで。うんー、だから常に自分がしゃべるといのは、

Student	TOEFL ITP	Total N of utterances (self-selected)	Trait anxiety	WTC (L1)	WTC (L2)
Taki	487	40(33)	2.33	4.75	4.75
Nachi	487	12(9)	4.67	5.75	2.75
Oto	490	1(0)	5.67	3.50	3.50
Class Mean	469.06	21.9	4.23	4.24	3.72
Norm (N=265)			4.35	4.41	2.95
Ryan (2008) (N=1896)			4.09	4.04	1.89

Nachi

- 不安高い
- L1 WTC 高、 L2 WTC 低
- 留学経験なし、高校文法訳読中心



- 議論の準備

言うことを日本語で考える、英語で考える、辞書で単語を調べる、頭の中で状況を考えてリハーサルする。



- 自信
- 仲の良い友達が意見を言うので刺激を得る
- よく話す学生がどのように言うか分析



- 毎回一回程度意見を言う
- クラスメートと馴染むにつれ徐々に不安も低下

Nachi

「雰囲気静かなので発言しにくい」「他の人の英語は上手で怖気づく。」と記述していることに対し
最初、やっぱり最初のうちは。皆うまいって思って。……
後半は下手でもいいから話そうって。

準備について

やっぱり、自分で参加しようと思ったら、そういうのが全く準備してないと、まだ英語で言えるような能力もないし。なんか、つまって、まだ言えないなって思って。自分、準備してから言おうって。

(トピックを)見て、自分が発言するっていうシチュエーションを考えて、考えながらやってた。

Student	TOEFL ITP	Total N of utterances (self-selected)	Trait anxiety	WTC (L1)	WTC (L2)
Taki	487	40(33)	2.33	4.75	4.75
Nachi	487	12(9)	4.67	5.75	2.75
Oto	490	1(0)	5.67	3.50	3.50
Class Mean	469.06	21.9	4.23	4.24	3.72
Norm (N=265)			4.35	4.41	2.95
Ryan (2008)			4.09	4.04	1.89

Oto

- L1WTC L2WTCとも低め
- 不安が高い
- 短期留学の経験あり、高校で議論の授業あり



声が小さいことに対する懸念
よく喋るクラスメートにびっくり
話を聞いて理解が進む

「えっ？」聞き変えされると怖気つく



発言せず黙っている
態度の変化

すごい、ってびっくりした。。

教科書の自分で読んでるだけでは気づかなかったことを、皆が言ってる中で、「あーそうかー」みたいな感じ。こういうことを言ってたんやみたいなの。

Oto

「初めは自信がなくて、考えを言いにくかったけども、簡単なことでも何かいいたいと思うようになっていった」

自分はいあまり発言しなかったけど、他の人で、言ったら悪いですけど、文章になってない人とか。でも、詰まり詰まりでも、発言してる人がいたので。それでも皆ちゃんと聞いているから。うんうん、とか言って。分からなかったら、質問とかもしてもらってたから。そういう風に発言してもいいんだなというか。

うん。ちょっと言ってみたら通じるということに気が付いて。

発話量(という行動に表れるWTC)に影響する要因

- 学習歴 (留学経験、これまでどのような授業をうけてきたか
→英語を使った経験 英語でのWTCに影響)

MORE ENDURING

- 性格 (不安、緊張、母語でのWTC)

- 習熟度、英語を使う自信

- 動機付け、自らに対する挑戦心

- 責任感 (議論を進めるために何

- 文化的規範 (議論を独占すべき

- 他者の評価に対する意識、他者

- Belief (完璧主義、みんなが同様に

- 知識 (トピックに関する知識)

- 準備して議論にのぞむかどうか

- クラスメートの発言量、クラスの雰囲気、

- 直前に誰が何を言ったか、

- 他者(先生など)の反応のしかた

学習者のコミュニケーション行動と
その時の
ころの動きに
注目することで
見えてくるもの

MORE SITUATED

引用文献

- ◆ Ellis, N. & Larsen-Freeman, D. (Eds.). (2009). Language as a complex adaptive system. *Language Learning*, Special Issued, 59, Supplement 1.
- ◆ Izumi, S. (2003). Comprehension and production processes in second language learning: In search of the psycholinguistic rationale of the Output Hypothesis, *Applied Linguistics*, 24, 168-196.
- ◆ King, J. (2013) Silence in the second language classrooms of Japanese universities. *Applied Linguistics*, 34, 325-343.
- ◆ 北川達夫・平田オリザ(2008)日本には対話がない 東京:三省堂
- ◆ Larsen-Freeman, D., & Cameron, L. (2008). *Complex systems and applied linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- ◆ MacIntyre, P. D., Clément, R., Dörnyei, Z., Noels, K. A. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation. *Modern Language Journal*, 82, 545-562.
- ◆ McCroskey, J. C., & Richmond, V. P. (1991). Willingness to communicate: A cognitive view. In M. Both-Butterfield (Ed.), *Communication, cognition and anxiety* (pp.19-44). Newbury Park, CA: Sage.
- ◆ Norton, B. (2000) *Identity and language learning: Gender, ethnicity, and educational change*. London: Longman.
- ◆ Ryan, S. (2008). The ideal selves of Japanese learners of English. PhD dissertation, University of Nottingham.
- ◆ Swain, M. (2005). Three functions of output in second language learning. In G. Cook, & B. Seidlhofer (Eds.), *Principles and practices in applied linguistics: Studies in honour of H. G. Widdowson* (pp. 125-144). Oxford: Oxford University Press.

- ◆ Tomasello, M. (2003). *Constructing a language*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- ◆ Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *Modern Language Journal*, 86, 55-66.
- ◆ 八島智子(2004).『第二言語コミュニケーションと異文化適応：国際的対人関係の構築をめざして』 東京：多賀出版
- ◆ Yashima, T (2010). The effects of international volunteer work experiences on intercultural competence of Japanese youth. *International Journal of Intercultural Relations*. 34, 268-282.
- ◆ Yashima, T. (2015). *Imagined L2 selves and motivation to communicate*. Plenary Speech. JALT 2015, 41st Annual International Conference on Language Teaching and Educational Materials Exhibition. Nov. 22, 2015, Shizuoka Convention & Arts Center “Granship, ”Shizuoka, Japan.
- ◆ Yashima, T. Zenuk-Nishide, L., Shimizu, K. (2004). The influence of attitudes and affect on willingness to communicate and second language communication. *Language Learning*, 54, 119-152.
- ◆ Yashima, T., Ikeda, M. & Nakahira, S., (2016). Talk and silence in an EFL classroom: Interplay of learners and context. In J. King, (ed.) *Context and the learner in second language learning*. (pp.104–126). Hampshire, UK; Palgrave Macmillan.
- ◆ Yashima, T., MacIntyre, P. & Ikeda, M. (2016). Situated willingness to communicate in an L2: Interplay of individual characteristics and context. *Language Teaching Research*. 1-23. DOI: 10.1177/1362168816657851